

EWC Rd.4 Bol d'Or 24 hours



9 / 18 - 21

予選 : 12 位 (SST 3 位)

※ライダー 2 名の平均で決定

大久保 光 1:54.229

渡辺 一樹 1:53.593

伊藤 元治 欠場

奥田 教介 1:56.148

決勝 : DNF

※エンジントラブルによりリタイア



今シーズン、私にとってボルドール24時間耐久レースは、EWC参戦としては2戦目のレースとなりました。鈴鹿8時間耐久レースには裏方として関わっていたため、ライダーとして実際にレースに出場するのは、ル・マン24時間に続いて今回が2回目となります。シーズン終盤の重要な一戦であり、年間ランキングを左右する意味でも非常に大切なレースでした。

今回のレースに向けては、久しぶりとなる1000ccマシンでのロードコース走行に備え、事前準備に力を入れてきました。普段から行っているXR100でのフラットダートトレーニングに加え、よりパワーのある車両への対応力を高めるため、450ccの車両を借りてダートトレーニング

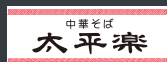
も実施しました。マシンの挙動を身体で受け止める感覚を呼び戻すことを目的としたトレーニングでしたが、それでも実際に1000ccでロードコースを走るのは久しぶりであり、最初は無理をせず、様子を見ながら慎重に走行を重ねていきました。

ボルドールでは、フリー走行において2台の車両を使用することができましたが、フリー走行セッションでは赤旗が多発し、ほとんど走行することができませんでした。しかし、限られた走行時間の中でも、少しずつペースを上げていくことができたことは、決勝に向けて大きなプラス要素となりました。

木曜日に行われた予選1回目では、光選



手と一樹選手が中心となってタイムアタックを担当し、元治選手にも新品タイヤを投入してアタックしてもらおう予定でした。しかし、その走行中に元治選手が転倒し、手を負傷してしまいました。チームとしては非常に心配な状況でしたが、私自身はまず車両の状態確認を最優先に行い、チームの判断を待ちました。その後に行われたナイトプラクティスでは、私も走行の機会を得ることができ、光選手や一樹選手とほぼ同等のタイムで



EWC Rd.4 Bol d'Or 24 hours



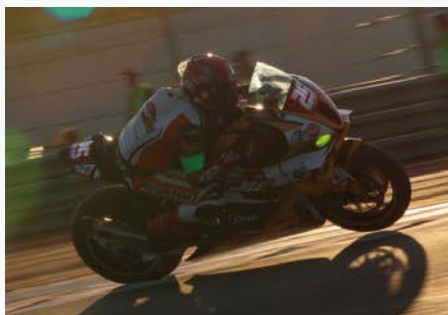
周回を重ねることができました。夜間走行特有の視界やリズムにも問題なく対応でき、決勝レースに向けては非常に良い感触を得ることができました。この時点では、チーム全体としても手応えを感じており、上位争いを十分に狙える状態にあると感じていました。

金曜日に行われた予選2回目では、光選手と一樹選手がさらにタイムを伸ばし、予選順位を大きく上げてくれました。一方で、元治選手はこの日の朝に病院でレントゲン検査を受けた結果、骨折が判明し、ドクターストップにより欠場が決定しました。これにより、24時間レースを3人で戦うことが正式に決まりました。耐久レースにおいてライダーが1人欠けることは、身体的にも精神的にも大きな負担増となりますが、チーム全員で覚悟を決め、3人でやり切るという覚悟を持って決勝に臨みました。



迎えた決勝レース当日は、雨も降らず、風もほとんどなく、ポールリカルサーキットでのレースとしては非常に珍しい

ほど安定した絶好のコンディションとなりました。



レース開始から大きなトラブルもなく走行を重ね、私は予選タイムを更新するペースで安定して走ることができていました。メカニックたちもピット作業で最高のパフォーマンスを発揮してくれ、ロスタイムがほとんどない状態でした。8時間経過時点ではクラス2位で通過することができ、この順位で経過ポイントを獲得できたことは、年間ランキングにおいても非常に大きな意味を持つものでした。チームとしても現実的に優勝、そして年間ランキング上位を狙える位置に付けていました。

しかし、私の4回目のスティント、レース開始からおよそ11時間が経過した頃、走行中にエンジンの異変を感じました。排気音が明らかにおかしくなり後方を見ると、サイレンサーから白煙が出ているのが見えました。その瞬間、エンジンが致命的なトラブルを起こしたことを悟りました。



私は無理に走行を続けることなく、レッカー車に乗ってピットへと戻りました。ピットに戻り、メカニックたちが懸命に車両を確認の様子を見守りながら、何とか修復できないかという思いで状況を見つめていました。しかし、ほどなくして修復不可能であることが判明し、その時点でリタイヤが決定しました。

終始トップ争いを繰り広げ、非常に良い流れでレースが進んでいただけに、この結果は言葉にできないほど虚しく、悔しいものでした。自分自身の走り、チームのパフォーマンス、戦略のすべてが噛み合っていただけに、「もしも」という思いが頭を離れませんでした。それでも、これが耐久レースであり、最後まで何が起るかわからないという現実を改めて突きつけられたレースでもありました。この悔しさを無駄にすることなく、今後のレース活動に必ず生かしていきたいと思えます。

